

海外研修報告-the 30th International Primatological Society Congress,

国際霊長類学会大会マダガスカル-

浅見 真生（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

〇はじめに

WMO では野生動物の保護管理、生物多様性保全の発展に寄与することを目的とした研究助成制度・海外研修制度を設けています。筆者は 2025 年 7 月に会社の海外研修制度を利用し、国際霊長類学会でポスター発表を行いました。学会の様子をお伝えするとともに、夏季休暇をいただき訪問したアンダシベ Andasibe の自然保護区の動物たちと現地の自然保護活動の様子をご紹介します。

国際霊長類学会は、その名の通り非ヒト霊長類（サル・類人猿・キツネザル等）の科学研究を促進し、霊長類のすべての種の保全を推進することを目的とする学会です。2 年ごとに国際会議を開催しており、第 30 回大会は 2025 年 7 月 20 日～25 日にマダガスカルの首都アンタナナリボ Antananarivo にて開催されました。当初の予定では同年 8 月 10 日～15 日に開催される日程でしたが、マダガスカル政府が開催する南部アフリカ開発共同体サミットのために学会会場が使用不可となり、急な会期の変更がありました。開催の約半年前のアナウンスだったため、既に航空券を購入していた参加者には大打撃です。高価な航空券を再度購入するのか、学会は諦めて現地でのバカンスに切替えるのか、SNS では混乱の様子がうかがえました。筆者は幸運にも航空券を手配する前だったので事なきを得ましたが、こうしたトラブルは海外の学会あるあるでもあります。現地で暴動が起きる、伝染病が流行する、自然災害が発生する、こうした問題により参加を諦めた国際学会がいくつもあります。行けるときに行っとく、こ

れに限ります。

マダガスカルは、アフリカ大陸の南東、インド洋上に位置する島国です。日本の約 1.6 倍の面積がある世界で 4 番目に大きな島国であり、長い間大陸から隔離されてきたため、他では見られない動植物が非常に多い「生物多様性ホットスポット」とされます。霊長類ではキツネザル類が有名で、100 種を超える大小様々なキツネザルが生息しています。童謡で有名なアイアイもマダガスカルの生き物です。一方、マダガスカルの森林破壊は深刻な状況にあります。焼き畑農業や燃料用木材の利用、ローズウッドなど高級木材の違法伐採や輸出により、自然林の面積は著しく減少してきたとされています。また、世界最貧国の一つでもあり、2025 年 10 月には軍が政権を掌握し大統領を追放するなど、政情不安の問題も抱えています。国際学会への参加・発表に加えて、こうした文化や自然環境、政治の状況が日本とは大きく異なるマダガスカルの自然保護活動の取組みを知ること、海外での保護管理の現状の理解を深め、見識を広げることを目的として渡航しました。

〇学会参加

飛行機を乗り継ぎ約 24 時間かけて到着したイヴァト国際空港から、首都アンタナナリボまで田んぼや牛の放牧地など、のどかな田園風景が続く道を移動します。街に近づくにつれて車や人が増え、住居や露店、都市での生活の様子が見えてきます。高層ビルこそないものの、人の往来は多く商店は賑わい、活気のある街並みでした。



アンタナナリボの街並みとマーケット



毎日 9 時・15 時のティータイム

学会はホテルを併設したコンベンションセンター Novotel Convention で開催され、発表者だけでも 600 名以上が参加（現地/オンライン合わせて）する大型の大会です。大会 2 日目から 5 日目にかけて、シンポジウム、口頭発表、ワークショップ、ラウンドテーブルが 7 会場同時進行で、またポスター発表が 2 夜に渡って開催されました。清潔で快適な会場には高速の Wifi も飛んでおり、毎日 2 回のティータイムとビュッフェ形式の昼食が提供されます。日本の学会では見たこともないような豪華で彩り豊かな食事が提供され、大満足でした。屋外テラスでのオープンな食事の場が日に幾度も設定されていることで、各国の研究者と気軽に話すことができました。

発表者の登録者数をみると、多い順にアメリカ 152 人、マダガスカル 131 人、ブラジル、イギリスが続き日本が 26 人でした。オンラインの参加者も含むため現地での参加総数は不明ですが、欧米諸国の研究者の指導と支援を受けて、現地で研究を行っているアフリカ出身の研究者や学生、調査助手による基礎的な生態研究に関する発表が目立って多かったです。また、保全を目的とした生息地の評価や地域活動、ドローン等を用いた最新技術によるモニタリングなどの研究発表に加えて、人間と非ヒト霊長類との軋轢を題材とした発表も様々な種・地域からの報告があり、興味深かったです。



学会会場

人間と非ヒト霊長類との軋轢として代表的なものが、アフリカ地域におけるヒヒ類（Papio 属など）の問題、およびアジア地域におけるマカク類（Macaca 属）の問題です。これらに加えて、アジアのコロブス類、南米のフサオマキザルや、アフリカのチンパンジー・ゴリラといった大型類人猿との間でも保護区域とその周辺の農地や人里で生じる問題が報告されています。ヒヒ類とニホンザルの属するマカク類は、いずれもオナガザル科に属する雑食性の霊長類で、非常に高い環境適応能力を持っています。こうした特性により、農作物被害や生活環境被害、人身被害といった衝突がアフリカ・アジアの各地で発生しており、対策と共存の在り方が課題となっています。

今回の学会で発表された事例として、インドの例を取り上げます。インドには、複数種のマカク類、ラングール類、ロリス類、テナガザル類が生息しており、多様な霊長類が分布しています。アカゲザル *Macaca mulatta* などの一部を除く多くの種は、生息地の喪失や森林の断片化により、絶滅の危機に直面している状況です。

Maria Anjum 氏の発表では、インド東部アッサム州に生息するゴールデンラングール *Trachypithecus geei* が、ライチやマンゴーなどの果樹を荒らし住居周辺に出没することが問題となっていることが紹介されました。対策として、本種を地域の自然保護の「シンボル種」としてエコツーリズムに活用し、観光による恩恵を地域にもたらすことで、地域の自然資源を「保護すべき資産」として住民が再認識するきっかけをつくり、保全と地域振興を両立させているそうです。一方、同地域ではアカゲザルによる家屋への侵入や作物被害も深刻であり、ゴールデンラングールとは対照的に「嫌われ者」となっています。行政が捕獲許可を出しても、住民の多くが殺傷を拒むため捕獲は進んでいないようです。日本でもニホンザルに対して「人に似ているから殺したくない」という心理が見られますが、インドではヒンドゥー教のサルを神としたハヌマーン神が崇められているため、宗教的信念がさらに深く根付いているようです。結果として、捕獲や駆除ではなく、防除に頼らざるを得ない状況ですが、現地の脆弱な電気柵などでは十分な効果が得られず、対応に苦慮している様子が伝えられました。さらに、筆者の大学院の同卒生である Himani Nautiyal 氏にインドの他地域の状況を聞いたところ、インド国内でも地域によって宗教観が異なり、ヒマラヤ周辺ではマカク類が、南インドではラングール類が神聖視されるなど、同じ霊長類でも住民の受け止め方が異なっているようです。このように、インドではサルの殺生をともなう捕獲は受け入れられず、決して食べない文化がある一方で、隣接するネパールでは一部地域でサルを食用とする習慣もあると

のことで、国外や国内の地域によって大きく異なる価値観が存在し、保護管理のアプローチに密接に影響を与えていることを実感しました。

大学院でマカク類の研究をしていた身としては、ニホンザルを含むマカク類が嫌われ者として扱われているのを悲しく思います。WMO に入って彼らの賢さとしたかさに由来する問題の大きさに直面し、同じように、またそれ以上に困っているであろうアジアの状況を知るにいたり、何とかこの問題を軽減していきたいと思うようになりました。

日本の現状を、インドにおける霊長類研究・保全の第一人者である Jihosuo Biswas 氏にお伝えしたところ、サルによる被害が大きく始めは保全活動に反対していた地域であっても、地域の自然の価値を伝える教育や啓蒙活動、サルの被害が発生しない資産価値の高い樹木の植樹等の活動を組み合わせることで、地域住民の理解と協力を得て保全を成功に導いた事例を教えてくださいました。また、「単純な保全か駆除かという二項対立ではなく、その間を諦めずに模索するアプローチが重要である」という示唆をくださいました。インドと日本という異なる文化の中で、霊長類との関わり方には共通点もあれば違いもあります。こうした地域の事例を知ることで、動物側の科学的な知識だけでなく、地域ごとの歴史や文化、宗教の考え方をよく理解し、人側の理屈や気持ちに寄り添って対策を展開していく重要性を改めて感じました。

筆者は2日目のポスターセッションにて、福井県の加害群と自然群の行動圏利用について発表を行いました。発表の中で、日本における被害防除対策の手法や、地域個体群の存続を担保しながら加害度の高い群れや個体に対して個体数調整を行っていることを紹介すると、アジア・アフリカ圏の研究者から対策や捕獲の手法、その効果についての質問が多くありました。特に多かったのが「電気柵は効かない」という意見でした。サルが「棒で電線をズラして入ってくる」、「最初だけで

効果がなくなった」、日本でもよく耳にする話です。ニホンザルの対策手法はほぼ確立されており、使い勝手のよい効果的な電気柵が開発されています。国内に限らず、国外にも効果的な柵の設置と管理方法の普及の余地はまだあります。一方で、スケールの違う大規模な圃場の守り方には日本とは違ったアプローチが必要だと感じました。

他国の被害防除対策の事例として、モザンビークではヒヒ類の被害に対して、カカシや天敵であるワシの絵の掲示（効果なし）、ハチの巣箱を回廊状に畑の周囲に設置するハチの巣柵、問題行動を起こすオス個体への発信機首輪の装着、および問題個体の他所への移送など様々な対策を試みているそうです。他所への移送は、アフリカではしばしば取られる手法のようで、ケニアでも100頭を超えるヒヒの群れを麻酔をかけて移送した事例があるようですが、詳細な状況は分かりませんでした。また、同じくヒヒ類による被害の大きい南アフリカ共和国では、問題個体の捕獲や群れの全頭捕獲を実施しているようです。さらに、中東サウジアラビアでもヒヒ類の市街地への進出が問題となっており、問題行動を起こすオス個体への発信機首輪の装着と追跡により追払いを実施しているとの情報が得られました。各国の様子を聞いてみると、どうやらヒヒ類の対策とマカク類の対策には共通するスキームが適応できそうです。



賑わうポスター会場

学会に参加し、世界の霊長類研究の新たな手法や成果、各国の保護管理の現場の取組みを学び、活発な議論に触れられたことは大きな収穫でした。特に印象に残ったのは、各国における保護管理の現場で生じている地域ごとの課題・工夫の共有でした。「人と野生動物の関係性」や「獣害」の問題が、霊長類においてもアジア、アフリカなど多くの地域で共通の課題であることを実感するとともに、若手研究者の発表やポスター会場にも活気があり、熱量を持って取り組む同志が世界に大勢いることに大きな刺激を受けました。各地域の状況に合わせた教育や、地域システムの構築の好事例などを共有し、日本の対策の手法を導入することで解決できる問題があると感じました。一方で、各地域の宗教観や自然観、経済的・社会的な背景などを十分に考慮したアプローチが必要であることも強く感じました。ある意味で、日本の地域ごとの多様な状況も、こうした国際的な課題の縮図のように思えました。



マダガスカルの桑田佳祐（恐らく）の爆音Live
とダンスパーティで締めくくるバンケット

○アンダシベ訪問

学会終了後、首都アンタナナリボから車で約4時間ほど東へ移動し、アンダシベを訪れました。移動中は、田園風景とユーカリ林が延々と続きます。ユーカリは成長が早いので植林に好まれる樹種で、現地では建材や調理用の炭などに利用されています。マダガスカルの森林の大半はユーカリ

林に置き換わっており、現在では赤い樹皮の目立つユーカリ林のある風景がマダガスカルの典型的な風景となっているようです。



田園風景とユーカリの植林（奥）

標高約 1,000 メートルに位置するアンダシベは、高温多湿な熱帯性気候に属し、訪問した 7 月は乾季にあたります。旧宗主国であるフランスの植民地統治時代に鉱山開発や林業によって栄えた町です。その後、独立とともにこれらの産業は衰退し、森林は自然保護区へと転換され、現在では観光業が地域の中心的な産業となっています。

この地域には、アンダシベ・マンタディア国立公園 Andasibe-Mantadia National Park や複数のコミュニティ・フォレスト（地域住民が主体となって森林を共同管理し、得られる利益を地域に還元する森林管理区域）が隣接して存在し、キツネザルの最大種であるインドリ *Indri indri* や多様なカメレオンなど野生生物の生息地として有名です。現地の報道によると、2023 年には約 3 万人の観光客が訪れ、そのうち約 30% がマダガスカル国内からの観光客だったそうです。

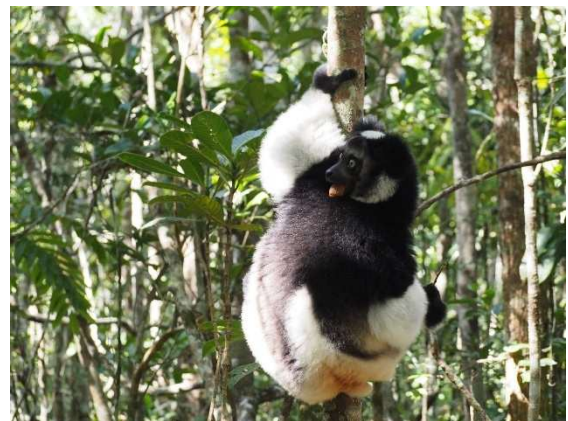
森に入るためには、必ず現地のガイドを帯同させる必要があります。アンダシベ村のガイドは皆ガイドの資格を取得したフリーランスで、資格を得たガイドは国立公園や管轄の異なる複数のコミュニティ・フォレストの森を自由に選んで客を案内することが出来ます。ガイドによって対応でき

る言語は異なり、マダガスカル語、フランス語、英語を操るガイドがいました。



現地の女性ガイド。夫婦共にガイドをしている。

インドリは家族単位でグループを作り、移動しながら生活しています。人付けされたインドリの群れの位置はガイドが毎日追跡して把握しており、林内のトレイルを案内して群れまで連れて行ってくれます。インドリは 10 kg にもなる大きさと歌うキツネザルとしても有名で、2~3 km も響く大きな声が目印となり、森に近づくと群れのいる方向を知ることが出来ます。



ガイドに呼ばれ降りてきたインドリ

インドリを探す道中、運が良ければ他のキツネザルも観察することが出来ます。私は 4 日間、昼間のツアーに参加し、ブラウンキツネザル *Eulemur fulvus* やダイアデムシファカ *Propithecus diadema*、クロシロエリマキキツネザル *Varecia*

variegata、ハイイロジェントルキツネザル *Hapalemur griseus* を見る事が出来ました。高い樹の上で団子状に丸まって休息するクロシロエリマキキツネザルは、双眼鏡越しにお尻を観察できたくらいの出会いでしたが、野生の姿をゆっくりと観察できたことは大きな喜びでした。



樹上で果実を食べるブラウンキツネザル

人付けされたキツネザルと観光客の距離は思ったよりもだいぶ近く、ガイドからは触ったり騒いだりしない限り止められることは無さそうでした（お行儀の悪い観光客はいなかったので本当のところは分かりませんが）。学会直後とあって霊長類学会関係者が大集合しており、林内で顔見知りの研究者と再会することもしばしば。大盛況でした。

最接近したインドリやダイアデムシファカは、5mくらいには近づいていたと思います。頭上を飛び越していくインドリを追いかける時間は、何にも増して楽しい時間でした。屋久島の西部林道を彷彿とさせる驚きの人付けの程度でした。

一部のコミュニティ・フォレストでは、インドリの好む若葉を使って手渡しで餌を与えており、感染症の危険や、エコツーリズムの在り方に思うところはありつつも、地球の裏側から見に来たのだから、動物を間近でこの目に焼き付けておきたいという思いは誰しも同じなのでしょう。一般の観光客も、学会参加者も喜んで至近距離からの観察を続けていました。ツアーに参加すれば高確率

で目玉の動物を見ることのできる状況を作っておく、この体制により多くの観光客を誘致できれば、それだけ地域の経済は潤い、森林を維持する資金を得ることが出来ます。現地の自然を守るために、何が最適な落としどころであるのか、考えていく必要があると感じました。



観光客に囲まれるダイアデムシファカ

アンダシベでは、ナイトサファリも楽しむことができます。夜の森では、夜行性のアヴァヒ *Avahi laniger* やネズミキツネザルの仲間、休息中の鳥類、カメレオン、多様なカエルや昆虫を観察することができました。キツネザルの目には「タペータム」と呼ばれる反射層があり、暗闇でライトを当てると目が輝いて見えるのでシカのライト



カメレオンの一種

センサスと同じ要領で活動している個体を探すことができるのです。これらのキツネザルたちがアンダシベ村の集落のすぐ裏手、林縁部にも出没していたことは驚きでした。人家の近くにまで姿を見せる彼らの存在は、人と野生動物とが共存していく一つの理想的な形であると感じました。

ガイド業やエコツーリズムによって恩恵を受ける住民が森の保護や管理に価値を感じている一方で、他の産業に従事する住民との間には意識の違いや経済的な格差があり、これが地域の課題の一つとなっています。焼き畑農業以外に生計手段を持たない農民が、持続可能でない形の焼き畑を続けることで、時には国立公園やコミュニティ・フォレストの保護林にまで火が広がり、延焼してしまうこともあるそうです。コミュニティ・フォレストでは、焼き畑をしなくても生産できる代替作



アンダシベの森とガイド



地域性苗木の苗畑

物の導入や、農業技術の普及、また地域性苗木を用いた植樹の活動などを実践しており、こうした活動にはエコツーリズムによる収益だけではなく外国のファンドによる資金面でのサポートを必要としています。

〇おわりに

今回の海外研修を通じて、霊長類研究の最前線や多様な保護管理の実践事例を知ることができました。特に、異なる文化・宗教・経済背景をもつ地域において、科学的知見に加えて地域社会との連携や共感が不可欠であることを実感しました。また、アンダシベの訪問を通じて、エコツーリズムと生物多様性保全のバランスを模索する、現地の取り組みや課題も知ることができました。こうした、マダガスカルや世界の非ヒト霊長類の多くが絶滅の危機に瀕し保護を必要としている現状と、ニホンザルを取り巻く獣害の問題は一見全くの正反対の状況のように思われます。しかし、とある一種が減りすぎたから守る、増えすぎたから減らす、といった単純な構造ではなく地域の生物多様性の保全と、人との棲み分けや共存を目指すという観点から、通底する思いがあると感じました。今回得られた知見や国内外のネットワークを活かして、今後の業務に励みたいと思います。

海外研修制度および川道国際学術交流協会の国際学会参加助成のご支援をいただき、学会への参加と現地視察の機会を得ることができました。心より感謝申し上げます。現地では研究発表に加えて、国内外の研究者と直接交流することができ、多くの刺激を受けました。世界の霊長類研究の潮流と保護管理の現状を学ぶことが出来たことは、自分にとって非常に有意義でした。このような貴重な機会をいただけたことに、改めて感謝申し上げます。